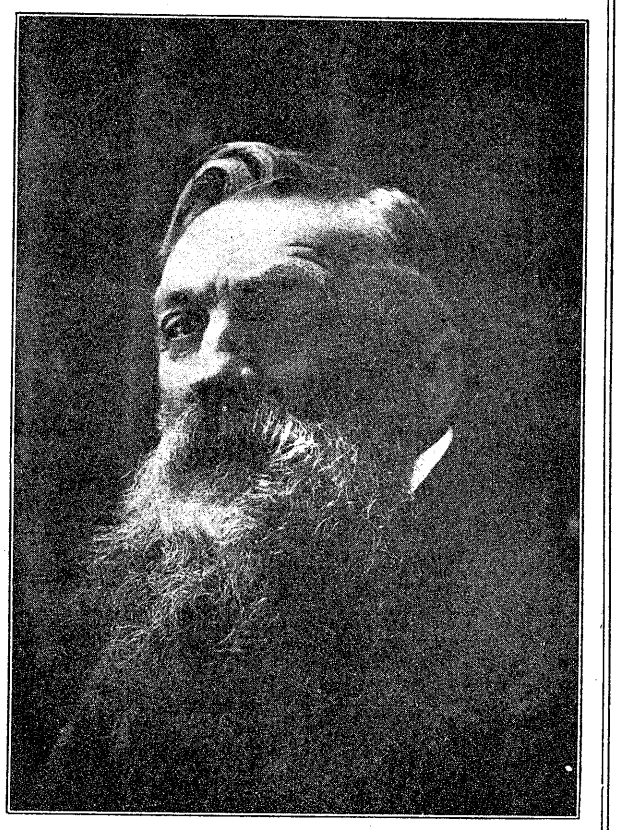
泰西現代巨匠傳叢（二）

佛蘭西彫刻家ロダン　上

森田冥靈子

傑出した藝術家は時流の趣味を超越して居る。それで凡俗には突飛に見え、異端者と見えることがあるので、彼等からは嘲笑されたり、迫害されたりする。拾九世紀も始めの頃、まだ一般の畫家は舊式の、極りきつた繪を畫いてをる時代に近世風景畫家の祖とも謂ふべきコンステブルは濡れた木の葉に輝く日の光りを書いた程、觀察が一歩時代に先だつて居つた。されば時人解せず、之れを『コンステブルの雪』と嘲けつた。又彼れは己れの眼に映じた通り、春や夏の森を綠に描き、當時の畫風に倣つて脂色を用ひなかつたので、サー、ジオージ、ビューモントに怒られた。斯かる例は澤山ある、これは僅かに九牛の一毛に過ぎない。然し世間の趣味も永久に一定の狀態に停滯して居るものでなく、或は天才の威力に征服され、敎導され、或は自から發達して其標準を高め、遂には天才のそれと同程度に達する時期が來る、此時になると天才の心の鼓動は公衆の心に一々反響する。茲に於て世間の人は、初め嘲笑し迫害した天才の光輝を始めて感知するに至るのである。コンステブルの例に就て觀ても、彼のやつたことが良いか惡いかは現今の人には殆んど問題にならぬ程明白である。前人未踏の新境地を開拓した獨創的藝術家が世人に其眞價を認めらるゝに至る順序は皆斯うであつて、コンステブルばかりではない、ドラクロアでもコローでもカルポーでもリユードでも皆同樣であつた。最近の而して最も著しい此種の例はロダンに於て見ることが出來る。ロダンが受けた反對や迫害は實に激烈なるものであつた。が屈せずに其主義を固持してをる中に世人は好奇心を起してきた。次ぎに彼れの作は「何物」かを意味して居りはしないかと考ふる迄になつた。而して最後に彼れの作は優れた美と力とを有する藝術界の嶄新な貢献であると認めざるを得なくなつた。即ちロダンは其の藝術的威力を以つて一般の趣味を自己の標準に迄引ずり上げたのである。斯かる譯であるから彼れの半世は藝術的奮鬪の歷史である



ロダンの肖像

彼れが兎に角公衆を其眼の前に見たのは四十近くであつて、しかも彼れの面前に現はれた公衆は大體に於て彼れに敵對行動を取つてをつた。彼れが長い間逆境に處し迫害に堪えて漸く世間を征服していつた徑路は人をして崇高な感を起さしめる。今や彼れは七十歳、巴黎に遠からぬムードンと云ふ風光明媚の地に立派な邸宅を構へて尙、好める彫刻を研究しつゝ餘生を樂しんでる。其名聲は歐米は勿論我國に迄喧傳されてをる。今日彼れに對する彼の國人の尊敬が如何程であるかを想像するに足るべき話を美術學校敎授の沼田氏から聞いたことがある　同氏が嘗て巴黎の小サロンに觀覽に行つた處幾多の彫刻の前では多くの觀覽人は色々批評やら噂やら喋々喃々して騷然たるものであつたがロダンの作品の前では、さながら其威嚴に打たれたかの如く群集は肅然として水を打つた如く、咳ぶきさへも遠慮してをる樣に思はれたと云ふことである。何にせよ現今のロダンは佛蘭西ばかりでない世界の大彫刻家であると稱しても誰れも非議する人はあるまい。

ロダン―正しく云へばフランソア、オーギュスト、ロダンは千八百四十年十一月十二日巴黎に生れた。彼れが誕生した家は、今では町の樣子が變つて、最早見ることは出來ないが、ラタン、カルチエーの外れにあるラルバレート街の三番地にあつたのだ。彼れの父ジャン、バプテスト、ロダンはノルマンデー出の人であつて職業は役所の書記、母は結婚前の名をマリー、シユッフェーと喚び其家族はロレーヌから來たのである。ロダンは此夫婦が三十代の時の子で彼れの上にクロチルドといふ姉を持てをる。八九歳迄近處の小學校に通つた後、ボウヴェイと云ふ處に彼れの叔父がやつてをる寄宿學校へ送られた。ボウヴェイ市は絨氈製造で有名な土地であるが、其れよりも一層此の市で著名なのはゴシックのパルテノンと謂はれし同市の寺院である。彼れが兩親の膝下を離れて居つた間の生活は此內氣な小兒に取りて餘り幸福ではなかつたが然し其學課はよく覺えた。此時分から圖畫は最も彼れの好む處であつた。然し自分では醫者か、著述家か又は演說家になる積りであつたそうだ。

十四の年に再び巴黎に歸つた。此の時は既に彼れの嗜好が商業などに向かないと云ふことは確かに判つてをつたけれども、何にが最も彼れに適するかは明かでなかつた。其頃第一回世界大博覽會が巴黎に開設された。その時一般の熱心は大いに彼れの心を動かしたに違ひない。だが是れよりも一層彼れの心に訴へたものはラタン、カルチエーの生活である即ち彼れは其周圍にある文學者、美術家の世界と日々接觸してるので此仲間に這入らうとの誘惑は切なるものであつた。殊に藝術を職とする樣な人には學費の少ないことなどは其難關でないので此貧乏な少年には一層氣に入つた。仍で醫學校（エコール、ヅメジシーヌ）に近きラ、プチット、エコール、ヅデサンと云ふ畫學校に這入た。此學校は其後裝飾美術學校（レコール、デザール、デコラチフ）と云ふ堂々たる名稱になつて今でも盛んにやつて居る。當時の此學校は徒第學校の樣なものであつて金のない生徒の行くには都合のよい學校だつた。此學校からはフレミエー。カルボー。ダルー。ルグロ。など云ふアカデミックの拘束を振離した新しき藝術家が澤山出で居る。ダルーやルグロがロダンの朋友となつたのは茲でだ。前者はロダンに二つ年かさ、後者は三歳の年長であつて、ロダンより少し前に此學校に居つたのだ。彼等が此學校で敎はつた先生はルコック、ヅ、ボアボードランと云ふ人で其人は素描、油繪に深き知識を有するに加へて眞の敎育的才能を有して居つた人である。此人は記臆畫と云ふ一種の敎授法を施した、即ち生徒に、或る物が他の同種類のものと區別さるゝ特徵の總てを觀察さして後其記臆を賴りに、其物の特徵を描き現はすことを勉强させる。當時一般の敎師達は此れを餘り感服しなかつたが然し此の方法で前記の藝術家の外、ファンタン、ラツールやレルミット。ギーオームなど云ふ藝術家が造られた。彼れが彫塑を試みて圖畫以外に特殊の興味を感じたのは此學校に居つた時のことである。此時代彼れが日々の課業は朝八時には學校に行き十二時迄勉强し午後はルーブル美術館（ピブリオテクアムペリアル）に行つて古代彫刻を寫生したり或ひは帝國圖書館に行

『鼻缺けの人』　ロダン作

つてミケランジェロ。ラファエルの作の版畫になつてをるものや彫刻に關する書籍など借りて之れを寫しなどした、而して夜は晝間描いた粗雜なスケッチを丁寧に寫し直しなどするのが常であつた。又時には彼れの家に近きセント、ジェネヴィエーブの圖書館は夜だけ公衆の閲覽を許すので、其處へ行くこともあつた。此時分描いたものは皆失はれて如何なものだが判らぬが、彼れは此學校に居た内に幾度も賞を受けた。一度は石膏模型の寫生で銅牌を得、十七の時には塑造で第一等銅牌を得又、古代彫刻寫生で第二等銅牌を得たことがある。此學校の三年級の終り頃に彼れは美術學校（エコールデボザール）の競爭試驗を受けた。此美術學校（エコールデボザール）は千六百四十八年の創立で、繪畫、彫刻、彫版、建築を敎ゆる佛蘭西の最も由緒正しき官立學校で、敎師も又澤山居るから多くの美術學生は皆此處で其技を研究することを望むのである。然しロダンは美事に落第した、しかも一度ならず二度も三度も失敗した。これは彼れが後來發揮した藝術的傾向を考へて見ると此間に意味がある。落第の原因は決して彼れの技術が拙なかつたからでは無い、當時の作は彼が常に賞讃する十八世紀の作風に從つて考案し製作され、彼れの競爭者さへ彼れが製作をしてをる周圍に立つて讃嘆し其技術を羨やんだ位である。彼れが失敗の原因は其製作の表現法が獨創的で新機軸の萠芽を含んで居つたからであらう。此傾向は後になる程彼れの作に著しく強く顯はれて來たのである。美術學校（エコールデボザール）は所謂アカデミックの本家本元である。此因襲に固まつた處でロダンの樣な嶄新な畫家の容れられないのは寧ろ當然のことである。これはロダン計りでない近代の新らしい藝術家は皆然うである、彼等は此アカデミックの感化を逃れ樣〳〵として居るのだ。さればロダンが此學校に入學しそこねたのは一面から云ふと反つて幸福であつたのだ。何故なれば此時代のロダンは未だ自己の鑑識を充分信頼する程の經驗もなく謂はゞ赤くも靑くもなる白糸の樣なもの故、此學校に這入つたなら其偏狹な校風に化せられて天賦の才を充分に發揮することが出來なかつたかも知れない。例證は幾らもある。矢張彫刻家のリュードは幸か不幸か此學校に敎へを受けたことがあるが、彼は晩年に斯く云ふのを常とした。彼れが此處で受けた誓古は害になつた計りで反つて入學以前より惡るい作風を得た。それ故此學校に居つた七年間は彼れの生涯から差引かれた七年間であつたと、而して尙更に彼れは附け加へて云ふには彼れが此學校の感化を脫し、こゝで學んだことを忘れる爲めには彼れの成熟時期になつてから非常な骨折りを要したと。又ロダンの友なるダルーも此官立學校の生徒であつたが或る時其製作の缺點に就いてロダンに語つて云ふには『君は仕合せだ。私は自分の製作でまづいことをやつた時はいつでもそれを學校で敎つたことのせいにする』と。

『原始の人』　ロダン作

然しロダンは學校に這入れなかつた代りに何處かに研究をする處を求めなければならない。それで彼れは植物園（ジャルダン、デ、プラント）でバリーと云ふ彫刻家が敎えて居るので之れに入學した。此バリーと云ふ人は動物彫刻の名家で且つ畫家としても可成りの名聲を有した人である。此人の處へ毎日午後殆んど一年計り通つた。玆での研究法は最初に生徒は檻の中に飼つてある動物を觀に行き之れを觀察し寫生する。そしてスケッチブック及記憶が充分滿足されると直ちに敎室に歸つてそれの塑造にかゝると云ふやり方である。玆には附屬の博物館がある。それで此處にある骸骨を同樣の方法で研究することもある、即ちモデルの解剖的骨格を造り之れに肉を附けるのである。此バリーに就いてロダンは言つてる。『私しの注意を自然に向け、自然を解するの必要を感ぜしめ、私が爾後獨りで研究の出來る程度に迄敎育を授けて呉れた人は彼れであつた。彼れは藝術上の考へ及びそれを發表する力に於いて天才である。彼れの製作は其れが不朽に認めらるゝには唯大さの點を缺いてをる。此彼れの作が小さいと云ふのは同情すべき資本の缺亡の爲めである』と

彼れの學校生涯は此れで了つたが彼は貧乏であるから自活をせねばならなくなつた。それで數箇月間ルーボーと云ふ彫刻家の仕事場に其友ダルーと共に働いたが、此ルーボーは給金をよこさない、それで彼れは色々と口を尋ねた末、彼れが今迄學んだ知識技倆を以て金を得る近道は裝飾彫刻家（オルナメンティスト）の助手となることを發見した裝飾彫刻家（オルナメンティスト）と云ふのは建築の内外に取りつける裝飾的部分を石膏でつくる商賣人である、勿論人體の單像や群像は本當の彫刻家の仕事であるので裝飾彫刻家（オルナメンティスト）の方では空想的の頭首やカリヤタイドのついた花や葉模樣の窓飾り等を造るので、圖案は建築家から裝飾彫刻家（オルナメンティスト）に渡される裝飾彫刻家（オルナメンティスト）は又之れを石膏で造つて石屋に廻はす而して石屋が建築に用ふる堅固な物質に之れを移すと云ふ段取りになる。然し之れは其表面の仕事で實際は本當の彫刻家の領分に立ち入つて、もつと高尙な頭の働を用ふることもある。現今でこそすべて工業的になつて人は餘り是等の裝飾に重きを置かぬが昔しは表面から見た程職人的の仕事ではないのでロダンは裝飾彫刻家（オルナメンティスト）の仕事は彫刻家のそれの如く有意義なる者であると云つて居る。それで彼の通ふ工場の近所に花園がある彼れは其處に行つて植物を觀察しては嶄新な裝飾を考案して雇傭者を驚かし喜ばしたとなど屢であつた。斯う云ふ境遇は二十四歲迄續いた。其の間彼の技倆は追々と進歩し、彼は日中仕事場で生活費を得、夜は自分の研究に專らであつた。

此間、二十歲の時彼の姉クロテリドが死んだ。此姉は彼れを甚だ愛し彼を奬勵し彼を慰めた、彼も又熱心に姉を賞して居つた。それで彼は此姉の死について一方ならず悲しんで、之が其重なる動機となつて敎父エイマールの監督せる敎會の學校に這入つた。彼れは宗敎的生涯を送らうと思つたのだ。全體彼れは宗敎的傾向を母より受けて居り又神祕的傾向を持つてをる。少年時代の彼れは宗敎的感情が甚だ强かつた。後年彼れの作が神祕的宗敎的着色を帶びて來たのなどは大に其因があるのだ。彼れ自からも『自分が若い時分敎會の御勤めに出た時など私は本當に何か大に自分を改鑄するやうな或る物を感得した』と云つる。

然しエイマールの許に一年間許り居る内に姉の死を悲む情も追々薄らいで來たと同時に己れの天職は宗敎の領域中にないと云ふを自覺したので再び元の職業に立ち歸りアヴェニウー、デ、ゴムランに近いリュー、ヅ、ラ、レイヌ、ブランシュ、に自分の仕事場を定めてサロンへ何か出品しやうと人に傭はれて働く暇を竊んで色々やつて見た、此時代にも一つ肝要な出來事は二十三の時妻を迎へたことである。妻の處女名はローズ、ベーレと云つてこれからは彼れと共に幾多の辛慘を味はひ、長い間の逆境に夫を助けて今日の成功あらしめた健氣の婦人である。

彼れがサロンに出品する作品の主題を撰ぶに彼れか此れかと苦心してをる時一日下層社會に屬する一人の男が彼れの傭ひ主なる裝飾彫刻家（オルナメンティスト）の處へ使ひに來た。此男元は相應な暮しをして居つたものだが酒と不幸續きで零落したのだそうで、顏つきにも何處となく品のいゝ處がある多分伊太利出だらうが古代の希臘人羅馬人の骨格と似通つた處がある。加之も其鼻は歪つで且つ平たくなつて居るのが其顏の品格と著しい反照を示して居る。彼れは之れをモデルとして『鼻缺けの人』を造つた。

此作は希臘の寫實主義の最もよい再現とも云ふべきものである上に一層複雜な深刻な理想が加はつて居る傑作である。此胸像は千八百六十四年の春出來上つた。そして多大の期待を以つて其年のサロンに送つたが殘念にも撥ねられた。それは此像の表現法が餘り自由であるのと、自然計りを師として抽象的の法則に羈束せられぬ寫實主義を示してをるからである。かくてロダンがサロンは美術學校（ボザール）より少しは宏量だらうと思つた推算はガラリ外れた。然しロダンは少しも失望しなかつた、何故なれば最早此時には彼れには充分の自信がありと決して此作の眞價を疑はなかつたからである。爾來これは彼れの寶物である。しかもこれより十四年を經てサロンに出品された時は近代彫刻の傑作の何れに比しても劣らざる名聲を博した。

千八百六十三年に彼れは裝飾刻彫家（オルナメンテスト）の下に働くのを止めて彫刻家カリエール、ベレウズの助手となつた。此助手となつて間もなく、一度は醫學校（レコールドメヂシーヌ）通りの畫學校に居つた時分の知己で此時はストラスブルグに寺院の建築や修繕の彫刻を受負つてる人から呼ばれて巴黎を離れたことがある。又一度は馬耳塞で建築家カヴァリエーの下に同市美術殿の仕事を引受けたフルクェーと云ふ彫刻家に招かれて其處に行つたこともあるが皆僅かの期間であつて此以外には前後六年間もカリエール、ベレウスの下に働いた。而して此人との交誼は二十年間も繼續した。此カリエール、ベレウズはダビット、ダンジェーの弟子で丁度此頃名聲の頂點に達して居る時で、彼の作物は社會から盛んに持て囃された。ロダンが此人の處でやつた仕事はベレウズから渡されたスケッチを基にして多くは小さな裝飾像を造るのであつた。此種のものが此作家の製作の大部分を占めて居つたのである。ロダンにとつては裝飾彫刻家（オルナメンテスト）の處でやる事と比較すれば遙かに此方がいゝ『ベレウズの處へ行くのは私にとつて甚だ幸福だつた。なぜなら裝飾彫刻家（オルナメンテスト）を去つて人體を作る人の處へ行くのだから』と彼は云つた。然し此等の作品はベレウズの名で世間に出すのだからロダンはベレウズの作風を摸さなければならなかつた。ベレウズは彼れに、新奇の考案を許したが然しそれはベレウズの作風と矛盾しない範圍に於てと云ふ條件つきだ。だから此時代ベレウズの作として世に出たものゝ内、實はロダンの手になつたものが甚だ澤山ある。かく他人の作風を始終摸して居るのだから必ず彼れの作風は、少くとも一時、其影響を受けたに違いないが、流石に彼れは之に氣が付いて持前の不羈なる精神は茲にも其効能を表はした、其上此一時の不利益の代償として彼れは彫塑の篦を使用する手腕の熟達を得た。最も此技能は一部は彼れの天賦であるが、一體ベレウズは十八世紀風の輕い優美な彫刻を作る人で仕揚げは綿密で滑澤であるから此種の熟練を得るには極く都合がよいのである。其他彼れが茲で研究し得たことは群像の効果である。彼れが後年嶄新な奇拔な方法を採用する以前に彼は群像の効果を最も有力ならしむるには、唯各人物にそが自然の働作によつて生ずる位置を與ふることのみならず—即ち唯裝飾的動機でなく最も勢のある動作に從ふのみならず—又此等全體の群像を、自然の敎へに從ひ、幾何學的形體即ち三角、四角形、或ひは長方形、平行形の中に收まる樣にすることであると云ふことを的確に證明してをる。

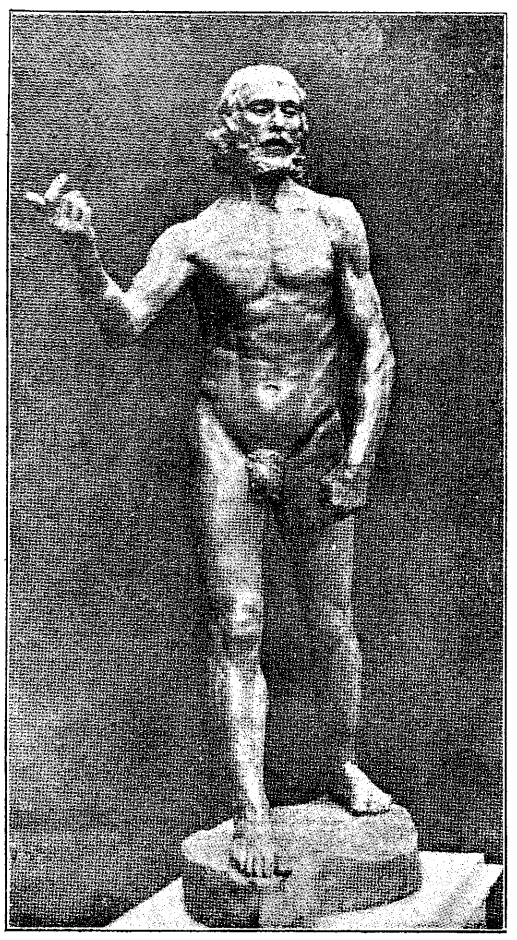
普佛戰爭の始まつた時に彼れは國民軍の伍長として具さに籠城の困苦を經驗した。それでも機會と方便さへあれば其の技を琢磨した。此の戰爭が終つて後、彼れは糊口の資を得る爲め一時巴黎を去らねばならなくなつたので初めは倫敦に行くつもりで出掛けた。が途にブラッセルを通つてカリエール、ベレウズを訪れた。此彫刻家は戰爭の始まる前に白耳義の建築家スュイと云ふ人に招かれて此ブラッセルに來て仝市取引所（エクスチェンジ）の正面の壁の裝飾彫刻をやつて居つたのだ。而して此の人はロダンに前の如く彼れの仕事場に働くことを勸めた。それでロダンも其氣になり以前の如く彼れの助手となつた、茲で彼れは『墳墓の靜寂（サイレンス・ヴァン・ツム）』を作つて著名なるジュリアン、ヂーレンスと云ふ彫刻家と相知つた。ヂーレンスは當時二十代の青年であつたがロダンは此人の才を甚だ賞讃した。

暫くして巴黎の市もやゝ秩序を回復して來た。此の時ベレウズはブラッセルの仕事がまだ完成しないのに佛蘭西に歸つた。此際彼も本來なら一緒に歸るのであるが仕事のことで兩者は感情を害して居つたので遂に分離することゝなつた。

此時分にロダンは母を失つた、其他色々不幸があつたので一時は非常に閉口したが、今度はヴァン、ラスブールグと云ふ白耳義の人と提携する事になつたラスブールグは巴黎で一緒にベレウズの下に働いたことのある仲間で今度ベレウズが佛蘭西へ歸つてしまつて其仕事が未だやりかけであるので此ラスブールグが引受けることになつた。然し此仕事は彼れには少し荷がかち過ぎるので、ロダンを仲間に入れたのである。そしてロダンはすべて其力を自由に、拘束さるゝことなしに用ふることが出來るけれども出來揚りの作品は彼れの作品としないと云ふ契約で提携が成り立つた。

恁う云ふ仕事だからして金にはなつた。又前後六年間もブラッセルに居る内仝市の内に追々名前も賣れて來て折々は注文も來る樣になつた。それで彼れは例の大仕事をやる片手間に少さな美術品を造つた。

彼れは研究の資用が大分かゝるのと又彼れの性質が質素なのとで一寸見は相變らず貧困の樣ではあつたが、實際に於ては此白耳義滯在の半ば頃は最も經濟の樂な時だつた。而して彼は其資力に餘裕のある毎に平常渴望してる旅行に出掛けた。彼れが水夫の姿を作つてる中にミケランジェロの作を想起させる性質を己れの作品中に感じたのは此時分のことである、これは自づから現はれたので決して彼れが復興期の大彫刻家を有意識的に摸倣したのでない。それで彼れは其原因を知り度いと兼て思つて居つたので、此望みは千八百七十五年の伊太利旅行となつた。而して此旅行の結果とブラッセルに歸つて活人モデルの運動を長い間觀察した結果として彼は次の法則を發見した。第一は彫刻に表はさるべき態度は活人モデルの自然なる態度である。案出した態度や姿勢は身體の各部に存する調和の關係を破ると云ふことである。それ故ロダンのモデル使用法は他の人と變つてをる。『私は自分のモデルを長い間觀察する。私は決してモデルに姿勢を課さない。私は彼をして放たれし馬の樣に仕事場の内を自由に行つたり來りさせる。そして私は其間に自己の觀察を寫し取る。私が時々希臘の人々のやつたことを再び發見するはこの倦まざる研究によつてゞある。即ち勉强其れ自身の御蔭で決して希臘の像を摸倣するが爲ではない』と彼は說明してをる實際彼は時々希臘式に屬すると言はれる。然しこれは彼れが自然を師とするからで、仝じく自然を師とした希臘人に似るのは當然である。彼れは摸倣を非常に賤しむ、『古物を摸さうと決めたらば其の結果は何んである歟、即ちルイ、フィリップの彫刻—拙醜の極である』と云つてる。昔の彫刻が近代のものに優れてをるのは實に前に揭げた規則即ち自然を尊重するからである。第二の規則は人體の輪廓は其運動の爲めに即ち繼起的の刺擊を豫報する爲め、常に變化しつゝある即ち筋肉は其周圍に一種の諧調的起伏を以て緊張し弛緩しつゝある。而して彫刻家は其肉付けに際し、最も忠實に最も効果强く其姿態を說明する凸起曲線を撰擇するの自由を有す。即ち自然の物を適切に解釋するには幾分か或る部分を誇大にし又或る部分は幾分か犧牲に供さねばならない。然れば其結果は不具な形が出來るかも知れん。然しそれは



『ンヨジ、トンセ』　ロダン作

表情を強める目的を有する爲の犧牲で自然的の範圍内で行はれべきものである。強められたる部分は彫刻家の意志及判斷がこれを決定するが故に無論專斷的である、が然し狙つた目的が實在の活潑潑地の印象にあるが故に之れを現はすに此手段は必要となる。大眞理を寫す爲めに煩細の皮想的眞理を犧牲にすることのある寫眞である。第三の法則は人體の權衡に於ける重力の作用より演繹したものである。人は誰れでも小兒の時歩行を學ぶによつて得たる實際の智識を基にして行動するものである。身體の半部が何れの方向に如何樣の動作をなす時にも他の半部は之と權衡を保つ樣な他の動作をなす、故に人體の表面が圍む内に重力の中心がある、人體像が活人の示す如き力の均衡を得る爲めには彫刻家は其人體の表面を包む表面を觀察しなくてはいけない。ロダンは伊太利の傑作から此等の法則を發見したのみならず此を利用し且つ之れを改善することが出來たのである。

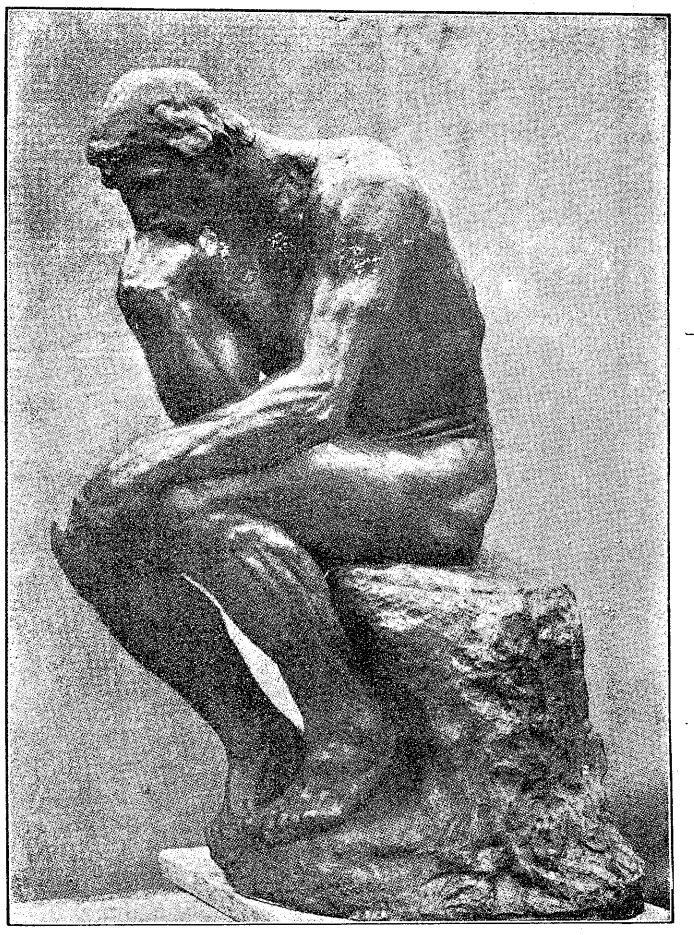
此他彼れは藝術の作品を研究しに處々に出掛けた。始めは白耳義に後には佛蘭西である。此藝術研究旅行の時日は不規則で一々枚擧する暇がない。或る處は日歸りに行つた、或る處は通りがけに數時間の滯在に過ぎなかつた。或る時は用向と遊山とを兼ねて長く滯在したこともある。まづ白耳義ではアントワープ。ブルッジ。ゲント佛蘭西ではシャーツル。レイム。ルアン。ジョン。アミアン等寺院建築を以つて有名なる都市を見て行つた。彼れはゴシック建築に非常な興味を持つてをるが此等の旅行で充分に之を味はひ解することが出來た彼れは此等中世紀の無名彫刻家の如く、裝飾彫刻（オルナメンティスト）家の許に、建築裝飾の仕事をやつたことがある。殊に彼れの作が深き意味と物の外形との調和したものである如く、此ゴシックの彫刻も、其奥の意義を表彰するに務めながら、しかも外形を無視しない等の點から最も適切に是等古代の作を了解した彼は如何に昔しの藝術家が其宗教の信仰と其國民的感情及想像を結合したかを觀察して此等の作に惜まず賞鑽の辭を與へた。

彼れのブラッセルに於ける生活は愉快な記憶となりて殘つてをる、彼れは市の郊外に住んで居つて住居には樹木のある小やかな庭園も附屬してる。ロダン夫人は今より當時を顧みて最も幸福なりし時期だつたと云つてる。ロダンは冬の日曜には彫刻美術館か或は繪畫美術館に赴き巴黎でもやつたやうに種々の名作を考竅したり又は寫生などした。夏の日曜の午後には近在の田舍に行き鉛筆や彩筆で風光を寫したり、迷想に耽たりする。又は郊外の酒屋などに立寄り田舍の樂隊を聽きながら又は夕方の光が野の上に薄れて行くのを眺めながら一杯のビールを傾ける事もあつた。

ロダンが白耳義でやつた重な仕事も遂に終つたそして彼れ自ら得る注文は止切れ〳〵で且つ餘り金にもならなかつたので千八百七十七年の春此の白耳義を去つて佛國に歸ることになつた。佛蘭西に歸るに就ては何か製作を持つて歸りサロンで一つ運だめしをやらうと考へた。先づ第一に其主題を撰まなければならない。丁度此頃は仕事もなく暇があるし殊には阿睹物に對する失望をも慰藉せんが爲めに屢々野や森に散策したので彼れは自然の意義を深刻に感得するに充分の機會があつた。その爲か家に歸つて仕事を始めると自然の幻しが製作の周圍に磅礴して來る。そして人間も木や花と同樣な意義を以て見る樣になつたそれで何か此心的狀態に適する主題を得たいと思つて居つたが、ジァン、ジァク、ルーソーの作を讀むことに因つても又其感は一層强められた。其の結果として『銅器時代（アージュ、ダリアン）』と名づけし作が出來た。此れは初めは一層適切な題『自然に覺めし人（コムハニキ、セヴェイエ、アラナチユール）』と云ふのを付けられたもので、又普通『原始の人』とも喚ばれる。肉體的には完全であるが、未だ智識の幼稚な、今や將に世界の意味に眼覺めんとする我が世界の最始の住人を表はした等身の石膏像で同年正月ブラッセルのセルクル、アーチスチクに出品された。其身體は骨格と云ひ筋肉の工合と云ひ間然する處がない。實に彼れが第二の傑作である。然しブラッセルに陳列された時には其意味につき種々の臆測が提出された。中には此態度は敗北の武士が敗軍の深き失望を表はした處だなどゝ云ふものもあつた。ロダンは故國に歸る際此像も携えて歸つた。そして其年のサロンに出品を許されたが茲でも此像は非常な世の注意を惹いた。

サロンの委員は斯んな寫實的の作を餘り觀たことがないので好奇の眼を以つて之れを檢査した。其の均合と云ひ細部と云ひ驚く程眞實である。それで或るものは此像は活きた人間から型を取つたものだと云ひ出した。實際そんなとは出來るものでないのだが彼等はロダンが何等か秘密の方法でやつたんだと思つたのであらう。斯くの如き反對は今迄一度も藝術界に例がない。これ程藝術家に對して烈しい侮辱はない。それでロダンは美術省のアンダー、セクレタリー、なるエドモンド、チュルケ氏に公の手續きを以つて訴へた。チュルケ氏は彼れの作に感服し又其誠實の作品たるを信ずる人で此以後もロダンの爲めには非常に盡力した彼れの恩人である。同氏は此訴を聽いたので數人の美術審査官に調査委員を命じた。然し此等の人も案外公平でなかつたのでロダンの利益になることは可成く申告しなかつた。此の公けの取調の他ロダン自身も人の忠告に從ひ、此像の製作に使つたモデルの手足から寫眞や型を取つて之れを證據に此攻擊の理由なきを證明しやうとしたが之れも餘り効果がなかつた。當時の彼は金もなければ勢力もなかつた。しかも彼れの對手は其言論社會に重きをなす人々だ。この儘であつたら彼は終世此汚名を拭ふことが出來なかつたかも知れない。然し正義は何時かは捷利を得る。第一彼れが使つたモデル—これは白耳義の兵隊であつたが—自から巴黎へ來て彼れの爲めに證據にならうと申し來した。然しこれよりも有力だつたのはポール、デュボア。シャピュイの二彫刻家が彼れの仕事場に來て、彼れの製作を實地に目擊し、かゝる作品を作り出す人なら『銅器時代（アージュダリアン）』を作るにさる賤しき手段を要することはないと信じたので、此二人はカリエール、ベレウズ。ラプランシュ。ファルギエール。シャプラン。シャプイ。トマス。等他の藝術家に圖り一同署名して美術署へ手紙を送つた其の内には『實物より模型を取る處に無之、ロダン氏は實に、大彫刻たる價値を有する優れし人體像を作りたるものに御座候』と云つてやつた。斯くして此像は初めて出品した時より三年の時日を經て銅像に鑄られてサロンに歸り第三等賞を得、遂に政府で購買することになつて茲に此作の價値は充分に認定された。即ち此事件は結局ロダンの捷利となつた。此像一時はリュクサンブールの庭園に置かれたが後に同美術館内に移された。此事件の爲めロダンの名は反つて唯其作の價値によりて知らるゝよりも一層廣く知られ加ふるに彼れに對する世間の同情は彼れに有益なる友人を多く齎らした。然し同時に又多數の敵をも造つた。

此事件が最後の解決の付いたのは千八百八十年一月のことである。彼れが得た猜疑は實に愚にもつかぬ事ではあるが兎に角汚名が洗ひ去られて青天白日の身となる迄は無論藝術品としての彫刻など依頼されることはないので彼れは再び工藝裝飾の方面の仕事を求めた。此方面ではカリエール、ベレウズと關係のあつた時代から多少の評判もあるし、又何時でも此方面では技倆ある製作家の需用があるので相當に急がしかつた。然し其旁ら彼れは又己れの方の製作にも從事した、そして今度はセント、ジョンの像を作つて同年のサロンに出品した。此モデルになつたのは伊太利から來た許りの人間で其れ迄モデルをやつた事がないのであつ



『瞑想の人』　ロダン作

た。それでロダンは唯彼れに手を擧げて歩けと命じた、そしてモデルが命せられたことをやつた時に『そこで止まれそして其態度を維持せよ』と命じて其瞬間の心持ちを此像に寫した。其心持ちはよく此作に表はれて少しも無理がない。將に歩まんとする概がある。それ故活き〳〵した印象を與へる。仔細に檢査すると此の像に現はされた皮膚は骨でも睫でも突起した部分の上層では緊張してをり、緊張しない部分は柔軟に現はされてをる。然し彼れが此處に於ける功績は肉體を以つて精神上の或るものを體現せしめた處にある。之れがサロンへ出たときには色々の批評があつたが中にはセント、ジョンと云ふ宣教者を裸體で表はしたのは不適當だなど〳〵批難するものもあつたが全體から謂ふと好評であつた。實際難者も其眞の弱點を見出す事が出來なかつた。そして翌年のサロンに銅像になつて陳列され之も又千八百八十四年政府に買ひ上げられ今はリュクサンブールにある。これが彼れの第二の捷利である。

ロダンがゴンクール兄弟やアルフヨンソ、ドーデー其他の著名の文學者及彫刻家（エッチャー）として名高きブラクモンド等と懇意になつたのは丁度此の頃である。ゴンクールは其筆で三つの物を世間に流行さしたと自慢してをる、それは一に自然主義、二は十八世紀、三に日本美術とである。始めの二つに就てはロダンは修養深いものであるからゴンクール兄弟は何も彼に敎へることは出來ぬが第三のものに至つては彼等はロダンの師である。ロダンは彼等を通じて日本美術を深く知つたのである。それで彼れが日本美術に對する觀察は『日本人は自然を研究する。そしてそれを驚く程よく了解してゐる。』と云ふ言葉となつた。千八百七十九年にカリエール、ベレウズはセーブル陶器製造所の裝飾部長となつた。ロダンは佛蘭西に歸つて間もなく又同氏の仕事をしてをつたので今度ベレウズが同製造所に這入つたに付ロダンも茲に出ることになつた。こゝの勸めはロダンの好きな時に二時間でも三時間でも出社すること給料は出た時間に從ふと云ふ約束であつた。それで彼れは千八百八十年二月から茲に出ることになつた。丁度此時分佛國政府は巴黎包圍の紀念碑を普佛戰爭の時血戰のあつたル、ロン、ポアン、ヅ、クールブボアに立てることになつて此れは競技で採用するとのことが發表された。それでロダンは之に應ずる爲め今日『戰の精』として知らるゝ比喩的群像を製作した。殺されたばかりの戰士が倚りかゝれる柱の上に翼の生えた半裸體の女神が腕を擴げ拳を握りて踊躍してをる。其翼は歪み破れてをるが尙大氣を搏つてをる。冠れる兜の下に見ゆる其顏は叫號せる口腔の爲めに兇暴の表情を現はしてをる。此激烈なる運動の姿勢は其下に倒れかゝれる戰士の屍體とコントラストをなす。そして其戰士の手にせる折れた劍は彼れが生前如何に苦戰したかを語つてをる。これが此群像の大體の趣きで其感じは即ち戰爭其物である、而かも捷利、光榮を示すものでなくして敗軍の悲劇を語るものである。ロダンは巴黎包圍の當時親しく其慘狀を目睹して、戰爭の悲慘を充分に味つたので其心持は自ら此作に表はれたのだ。然し此彫刻は餘りに過激なので此競技では豫選の中にすら加へられなかつた。

『原始の人』事件は彼れに多くの味方を與へたが其中にも、エドモンド、チュルクェ氏は彼れの發展に最も深き關係を有する人である。彼れは『原始の人』事件が終つた後にも彼れが美術省のアンダー、セクレタリであつた間に種々彼れに同情ある助力を與へて呉れた。世の中に融通の利かない俗物は藝術の天才などは死なうが生き樣が元々實用向の人間でないから社會は痛痒を感じないと思ふか知れないが、彼等は國民の品格が如何に藝術によつて高めらるゝかを知らないのである。一國民の品位は其國民が藝術に對する熱心の程度で之を卜することが出來る。そして天才は國民の趣味品格を向上させる原動力であるから之れは國家の爲めに保護すべきものである。チュルクェ氏がロダンの爲めに公の力を用ひて迄盡力したのは此考から出たに違ひない。政府は先きに『原始の人』及『セント、ジョン』を買ひ上げた。其後、又老婆の裸躰像とロル夫人の像と及び『接吻』（ベイゼー）と題する作を購買したこは此等作品の功績に因るのは言ふまでもないことだが、チュルクェ氏の如き、美術に造詣深く且つ美術省の要路に居る人の盡力が與つて力ありしことも勿論である。此チュルクェ氏は千八百八十年に甚だ重要な製作を彼れに依囑した。それは當時に建築を企劃された裝飾美術館（ミュゼー、デザール、デコラチフ）の戸口を飾る彫刻全體で、『地獄の門』（ポルト、ドフンフエー）と云ふ名で世に有名なものである。ダンテの『地獄篇』（インフェルノ）第參カントに此フロレンスの詩聖がヴァージルに導かれて地獄の門に至る處がある。ロダンが此戸口裝飾に撰んだ圖題は此から思ひついたのである。ロダンは嘗つて千八百七十五年の伊太利旅行の折、十五世紀に於けるレヲ十世の法王政治、ゲルフ、ギベリーンの爭鬪、メデチ家の歷史や、十三、十四世紀頃の躁暴な伊太利生活が遺した跡を親しく睹て深く感動した。其後ダンテを讀むに及んで、彼れの心裏に此詩人の想像したものから題を撰んで彫刻に現はしたいと云ふ考が油然と湧いてきた。處へ今度此裝飾彫刻を依賴されたので早速此題に定めたのであるチュルクェ氏はロダンに此注文を與へた時、此裝飾彫刻の主題には何がよからう歟と訊ねた。其答へに彼は『戸一面に澤山な小な人間を彫りましやう、それなら、誰れも活人から型を取つたなど〳〵非難することは出來ないでしやう』と笑談を言つた。この返答は無論一場の諧謔に過ぎないが、實際彼の『原始時代の人』事件は深く其の心を傷けたと見え、未だに彼れを刺擊して不愉快ならしむることがあるのだ。それで政府が此重任を彼れに委ねたのも一つは彼れをして彼の根據なき汚名を雪がしめんとの好意に出て居る。此製作は大規摸のものであり、殊に其主題はしかく理想的包括的であるから從つて表現の方法も薄肉、厚肉、丸彫り等凡そ彫塑の技術として知らるゝ總ての手段を示すに最も適するので彼が之に依つて其技倆の眞價を遺憾なく發表することが出來るので彼の雪寃には最も都合がよい。此注文と共に政府はリュー、ヅ、リュニヴェルシテにある政府の大理石保管所を彼れの仕事場として無料で借し與へたのみならず、此仕事に要する充分の資金迄も供給した。爾來今日に至る迄三十年間彼は絶えずこれに從事して既に今迄に製作されしだけで建物の中最も大きな仕事場の一方の壁面を殆んど占領してをるが、全體は未だに完成とならない。此遷延に就ては色々臆測する人もあるが別に深い理由があるのではない、詩人が其詩を推敲する樣に彼は畢生の力を傾けて其考案を練り、幾多の試みをやつてをるのであろう。

此裝飾彫刻の樣子を云つて見ると、戸口は其高さ約十八尺程、破風を載き、凸起した枠で、二枚の扉は此枠の內側に收まる。破風の上には三人の屈强な男が互に靠たれあつて、恰も脚下の戸口に引込まうとする魔力に、協力して抵抗しつゝある樣だ。此れは『三つの陰』と題せらるゝもので、此群像に現はれた陰影は如何にも運命とか悲哀とか謂つた感情を强める樣な、不思議にも人を魅し人を默想せしむる力を持つてをる。此下に當り、門の梁の上には小壁を背にして『瞑想の人』が居つて、其下の扉に現はされた人間の愛憎恐怖の光景を瞰下し、人生の問題の默想に耽つてゐる。そして此像は上方の群像『三つの陰』と呼應して其纏りをつけてゐると同時に下部の陰鬱絶望の光景に對して其焦點となつてゐる。此像は始めダンテのつもりで作つたのだが今の題の方が最も適當だ。扉に現はされた彫刻の圖樣は必ずしもダンテのカントに從はず、一層範圍を擴めて人間苦難の有樣を表現し、兩側の方柱の表面には成功したる情慾、失敗したる情慾の標徵的人物を浮彫してある。

『カレイの市民の一部』　ロダン作

沼田一雅、中村不折、岡精一の三人が嘗てロダンを訪問した折、ロダンは這麼なことを云つたそうな「伊藤といふ男（故博文公）が此間おれの處へやつて來たが美術なんぞはまるで解らない男だ」